



## 『東大寺記録』と歴史の記録

稲葉 伸道（日本史学）

名古屋市の大須観音は知る人ぞ知る古典籍の宝庫ですが、ここに『東大寺記録』という表題を持つ一巻の記録が残されています。この記録は十九世紀に編纂された『続群書類従』では『東大寺縁起』の名前で収録されているように、東大寺の創建や建物建立の由来、歴代の別当などを二十四項目にわたって記した東大寺の歴史書というべき性格を持っています。ところどころ訂正された部分があり、草稿本であることがわかります。奥書・識語もなく成立年代や著者は記されていませんが、記された内容から判断して鎌倉末期、文保元年（1317）～元応元年（1320）ころの成立と推定されます。

中身を読んで見ると東大寺の本尊は盧舎那仏ではなく大日如来となっていたり、華嚴宗ではなく真言宗の本所であることが強調されています。なぜ、このような記録が書かれたのでしょうか。その答えは『東大寺記録』の末尾に付けられた「東大寺群訴目安」という一通の古文書から推測されます。元応二年三月の日付を持つこの訴状は鎌倉幕府に提出されたものです。当時、東大寺は東大寺こそが八宗（南都六宗プラス天台宗・真言宗）の本所であり、かつ真言宗の本所だと主張し、東寺や醍醐寺などと争っていました。朝廷に訴えたものの受け入れられず、鎌倉幕府に訴えたのです。『東大寺記録』は、その主張の根拠を示すために伝承や「神話」の類も過去の「事実」として記述した本と考えられます。訴訟のために東大寺の歴史を振り返り、記録したもののなのです。

過去はすべて記憶し記録できるものではありません。何が価値あるものか、何を取り出すかは、歴史を振り返る者の主観によります。ときには「事実」をねじ曲げて過去から歴史を取り出すことも見られます。『東大寺記録』は歴史の記録とはどのようなものかを考えさせられるテキストです。



『東大寺記録』巻頭部分

授業紹介—File66

## みんなで「『論語義疏』を読む」

専攻：中国哲学（哲学・文明論コース）

授業名：『論語義疏』を読む

「孔子先生、私、子貢はいかがでしょうか？」

これは古くから読み継がれてきた中国の古典『論語』の一節で、子貢が孔子に自身の人物批評を求めた場面です。こんな質問、普通怖くて聞けませんよね。一体、どうしてこんな質問をしたのでしょうか。

「子貢が質問する前に、孔子は多くの弟子を批評しています。けれど子貢について触れてくれないから、気になって自分からきいたのでしょう。」六世紀南朝梁の皇侃は、著書『論語義疏』でこう述べています。

孔子とその弟子の言行録である『論語』は、古くて分かりにくい上に、一章一章が簡潔にすぎて読み方がひと



各種各様の論語

つに定まらず、その真意をぴったり正確に理解するのはほとんど不可能です。事実、古来諸説紛々、皇侃はそんな諸説を適宜引用しつつ、『論語義疏』という注釈書を作り上げました。これがこの授業のメインテキストです。

注釈とはいえ『論語義疏』も漢文ですから、予習段階では、先ず辞書を引いて、一字一字の字義と用例、文脈を照合しつつ、丁寧に意味をとっていくことが肝要です。授業では、室町時代の訓点が付いた『論語義疏』や、大学者清原宣賢きよはらのぶかたの講義録『論語聴塵』ちようじんといった先人の遺した成果も並行して検討し、先生のご指導の下、理解を深めていきます。『論語義疏』に自説を残した古代中国人と、『論語義疏』を読んだ中世日本人と、今ここで授業に出ている私たちと、みんなで『論語』を読むのです。

「君は器だね」

この孔子の短い批評で、子貢はいくらか衝撃を受けたと推測されます。

[石丸 羽菜・服部 寛風(博士課程前期課程1年)]

授業紹介—File67

## 考古学実習 — 発掘調査実習 —

専攻：考古学（歴史学・文化史学コース）

授業名：考古学実習

考古学専攻の授業には講義や演習、講読のほかに実習という授業があります。考古学実習は一次資料を発掘するための技術と、出土した遺物を学術資料にするための技術を習得するための授業です。考古学専攻では実習の授業を重視しており、2・3年生のときにならざる受講しなければならない授業としています。

遺跡の発掘調査は考古学に固有の研究方法で、それを身につけるために毎年8月から9月にかけて発掘調査実習をおこなっています。

2001年から2012年までの12年間、石川県野々

市教育委員会の協力をえて発掘調査実習を実施してきました。この実習は同教育委員会が実施している発掘調査に参加し、土の色調や性質をみきわめながら建物跡や溝跡を掘る技術を習得することをめざしたものです。昨年度で都市区画整理事業にともなう発掘調査が終了したため、今年度は実施していませんが、数年後には再開したいと考えています。

また、名古屋大学の東山キャンパス内には古墳時代や平安時代の焼き物をやいた窯跡が十数基確認されており、それらを活用して2010年から発掘実習をおこなっています。狭い範囲ですが、学生が主体となって調査にとりこんでいます。今年も9月17日から9月29日まで実習をおこないました。その様子を考古学研究室のホームページで報告しています。関心のある方は是非ご覧ください。

[山本 直人(教授)]



野々市市二日市イシバチ遺跡の竪穴建物跡を発掘する学生  
(2012年8月)

最近の文学部

### 専攻を選ぶ

名古屋大学の文学部には研究対象、研究方法の異なるたくさんの専攻があります。受験を経てみな「文学部」の一年生として入学して、まずは全学で科目の共通する教養の授業を受けることとなります。文学部でどこの専攻に所属するか、つまり大学やその先の大学院で自分がどんな研究をしていくのかは、実は入学後、一年生の間に選択するのです（もちろん最初から心を決めている人もいますが、少数派のように思います）。一年生のみなさんは前期のうちに人文学講義という文学部の教員がオムニバス形式で行う授業を受けたり、教員による分属ガイダンスを受けたりして自分の研究したいことをイメージしていきます。本号編集の10月の終わりは、各研究室を訪問して教員や先輩から研究内容や研究室の雰囲気などについて直接説明を受けるガイダンスの時期です。（U記）

\*本紙では、名大文学部の多彩な内容を順に紹介していきますが、それまで待てない人は...  
名大文学部のWEBサイト <http://www.lit.nagoya-u.ac.jp/> まで（『月刊名大文学部』のバックナンバーもあります）